

口頭発表

日本語学習者の「言い換え」について —語彙知識とストラテジーに注目して—

小野 正樹 (筑波大学) 守時 なぎさ (リュブリャナ大学)
田村 直子 (ボン大学) 山下 悠貴乃 (筑波大学)

要旨

本研究では、初級後半から、中級、上級日本語学習者が行っている「言い換え」方法を分類し、体系を明らかにすることを目的とする。スロベニア、ドイツ、フランス、日本の大学生を対象として、紙面による「言い換え」調査を行った。その結果、「言い換え」を語彙的な知識に関わる9種類と、ストラテジーを含めた述べ方に関わる6種類に分類した。続いて、その分類に基づく調査データの分析結果から、語彙の難易度や、既習学習項目の影響から、その言い換え方法に影響を与えることを述べる。

【キーワード】 表現ストラテジー、言語内的知識、紙面調査、語彙の難易度

1 研究目的と位置づけ

「言い換え」という言語行動は、日常生活での待遇性を含めた位相による言い換え、話し言葉から書き言葉への言い換え、日常語から学術用語への言い換えなど、頻繁に、かつ多様に行われるものである。外国語学習では、CEFR や JF スタンドアードの能力記述文において「語彙やテキスト構成上の空白を補う間接的な表現や言い換えを使うことができる。(CEFR:B2)」と記される等、「言い換え」能力に言及されていることから、「言い換え」が言語活動において、重要な言語能力であることがわかる。また、教室活動でも、初出や難易度の高い語彙・表現を、教師が学習者に合わせて言い換えることも普通に行われる。その際に、どのような「言い換え」が有効かについても、明確な調査は見当たらない。

そこで、学習者がどのように「言い換え」を行っているのか、また、行えるのかという調査は、学習者の観点から「言い換え」方法の全体像を示すという点で、語彙教育、会話教育にも貢献できると考える。「言い換え」については、ストラテジーと語彙知識に関わる問題と考えている。先行研究として、ストラテジーについては、Tarone(1981)が「言い換え」(paraphrase)を「コミュニケーション時に起こった問題を乗り越えるコミュニケーションストラテジー」として位置づけ、借用、援助の要請、身振りの使用、回避と並べて位置づけている。中でも、「言い換え」(paraphrase)を「近似的表現(approximation)：正しくないと知っているが、話を満足させるのには十分な意味的特徴を共有する目標言語の単語や構文を使用すること」と規定しているのは、辞書的な意味から乖離して、文脈に沿った表現も視野に含めているからである。そうした「知っている」すなわち「知識」については、言語知識として、宣言的知識/手続き的知識、明示的知識/暗示的知識の2種類のタイプがあると指摘されている(根岸・村越 2011)。

表1 言語知識のタイプ

知識内容の種類	宣言的知識 (ことばで説明可能な知識)	手続き的知識 (使える知識)
知識の言語化に関わる分類	明示的知識 (知識説明が可能)	暗示的知識 (自分だけが認識している)

□

知識内容の種類から、「言い換え」は宣言的知識と明示的知識に関わるが、例えば自転車の乗り方を説明する知識を手続き的知識と考えるならば、人間の動作や、機器の機能を言い換えるような場合には、「言い換え」が手続き的知識にも及ぶと考えられる。

2 調査方法

調査は紙面によるアンケートで、日本、スロベニア、フランス、ドイツの4つの大学において合計104人の学部生と大学院生に協力を依頼した。学習者の日本語レベルは初中級から上級までで、調査協力者にはテキストを読んでもらい、その中で使用されている設問項目について、自由記述形式とした。アンケートの指示は「日本語の別の言葉で書いてください。辞書は使わないで、自分の言葉で書いてください。」というもので、漢字には全てルビを振った。

テキストは市販の日本語教科書のテキストを一部改訂して、2種類用意した¹。日本語読解学習支援システム Reading Tutor²の単語レベル判定機能を用いて、5段階レベル中の一番下の「★とてもやさしい」という判定のものを調査文とした。両文とも日本語文章難易度判別システム³による文章難易度の判定でも「初級後半」及び「中級前半」というものである。リーダビリティ・スコアは4.94と3.58で使用文字数は584字(18文)、及び424字(11文)で、2つのテキストとも実験参加者が辞書を引かなくても十分読めるレベルのものを選定した。

調査項目は20問であったが、本稿では「必需品(級外)」、「幸い(2級)」、「変な音がする(3級)」と「財布(4級)」の4つについて報告する。なお、カッコ内の級は上述の Reading Tutor の判定基準である日本語能力試験の級に準じている。以下に、設問項目が実際にどのように使われていたかを示すために、テキストを抜粋で示す。

- (1) 年末の家族旅行は、ひどい経験が多かったです。着いた夜に、私たちはナイトマーケットに行きました。妹は、そこで**財布**を盗まれました。**幸い**、お金はあまり入っていませんでした。わたしたちはホテルに帰って、休みました。しばらく休んでいると、急に**変な音がして**、エアコンが止まってしまいました。
- (2) 最近の大学生は、自分の車を乗り回すのが、普通になっているようです。私の友人も、ほとんど車をもっていますし、バス停や駅の近くに住んでいる人も、大学まで車に乗って来ているようです。でも、車は学生の**必需品**なのではないでしょうか？

このように言い換え対象語句を文脈の中で示すことにより、辞書的意味の回答ではなく、文脈に則した状況で問う調査とした。

3 言い換え表現の分類

調査から得られた「言い換え」表現のうち、意味を取り違えている誤答や、言い換えた表現が意味的に成立していないものを省いた回答を分析した。まず回答を「言語内的知識」と「表現ストラテジー的言い換え」に二分する。前者は、言い換えの対象となる語句の指示対象を別の言語表現を用いて表現したものであり、一般に辞書記述、あるいはそれに相当する語彙知識である。図1に示したのは「言語内的知識」とその下位分類である。



図1：言語内的知識に基づいた言い換え表現の下位分類

最も多く見られた回答は「原文に戻せない」という表現群である。例えば「変な音がして」という語句を「妙で、おかしいことが聞こえるということです」⁴（説明）、「聞いた音は普通じゃありませんという意味です」（+否定表現）と言い換えるものである。これらの表現は、特定の調査協力者に見られたが、この回答が多い理由は、ある教育機関での教室内の言い換え練習「～は～という意味です」の影響が考えられる。

「原文に戻せる」回答としては、「財布」を「ウォレット」、「幸い」を「ラッキー」のようにコードスイッチングを含む表現、同義表現（例：「幸い」を「運が良かった」）、反語表現（例：「幸い」を「あいにくの反対」）、比喩（例：「財布」を「ふくろのようなもの」）、例示（例：「財布」を「私の財布はかわで黒いです」）等が見られた。

最後に「類義表現」について説明する。「類義表現」とは、意味的に類似・近似した指示対象を表す語句で対象表現を説明するものであり、例えば「変な音」に対して「おかしい音が聞こえる」「雑音がする」等である。後述するが「類義表現」の頻出度は、言い換えの対象語句によって大きく異なっているのが特徴である。



図2：表現ストラテジー的言い換えに基づいた言い換え表現の下位分類

上記図2は状況依存的な「表現ストラテジー的言い換え」とその下位分類である。「表現ストラテジー的言い換え」には、まず対象語句が使用される文脈やコンテキストを用いながら行う場合がある。これは「幸い」の言い換えによく見られた。例えば「悪いことが起きても、一番やばいものにならなかつたら、幸いといえます」(状況説明)、「好きなものを食べるとか友達に会うとか試験に合格する時幸いという気物を感じます」(文脈例示)のように一般的な文脈を提示しながら行う場合、また「財布が盗まれますけど、お金はあまり入っていませんでした」のように問題文として提示された文脈を用いて説明する場合である。

さらに、言い換え対象語句と時間的に付随する関係にある事柄を述べることによって言い換える例があった。例えば「さいふはたいていかばやジーンズの中にあります」(付随する状況)、本論文で分析する言い換え語句ではないが「遊べない」を「ともだちと時間をすごせなくて、パーティに行けません」(付随する出来事)、「変な音がする」を「それを聞くと、おどろくこと」(付随する心情)などと表現する例である。このように、学習者はさまざまな言語的方法を用いて「言い換え」を行っていることが分かる。

4 分析結果と考察

3章の分類項目を用いてデータの分析を行った。図3にその結果を示す。横軸は分類項目を示し、縦軸はその項目に分類された数を表している。分析対象の4問の分析結果を見ると、分類の大カテゴリーである「言語内的知識」を利用しての言い換えは、「表現ストラテジー」を利用して言い換えに較べて圧倒的に多用されている。これは、言い換えの方法として、語彙の知識、特に宣言的知識(ことばで説明できる知識)を使用していることを示している。

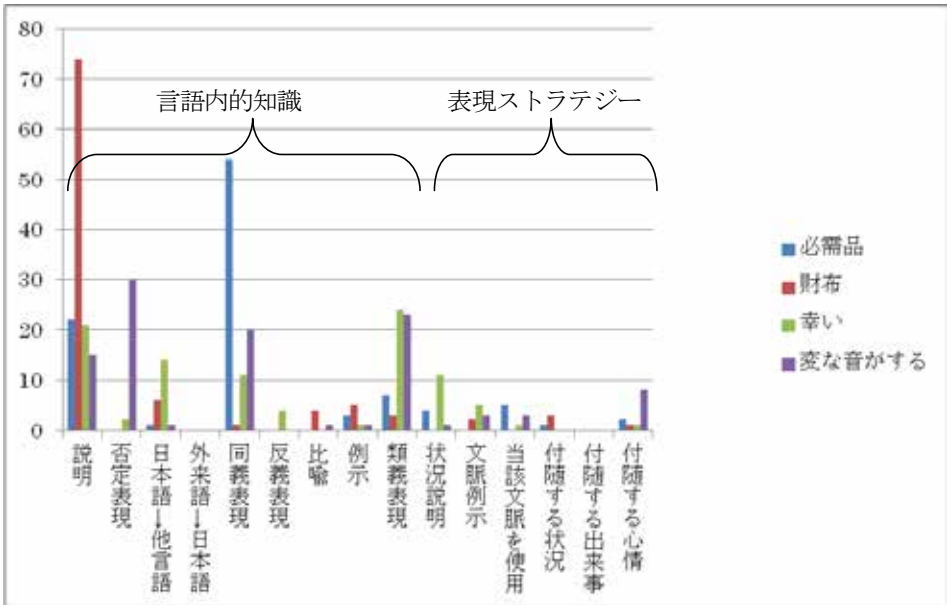


図3 分析結果

また、「財布 (4級)」と「幸い (2級)」の分析結果に注目すると、「財布」は、「同義語」「類義語」が少なく、「説明」が極端に多いのに対し、「幸い」は「説明」よりも「同義語」「類義語」を合わせた数値のほうが多くなっている。

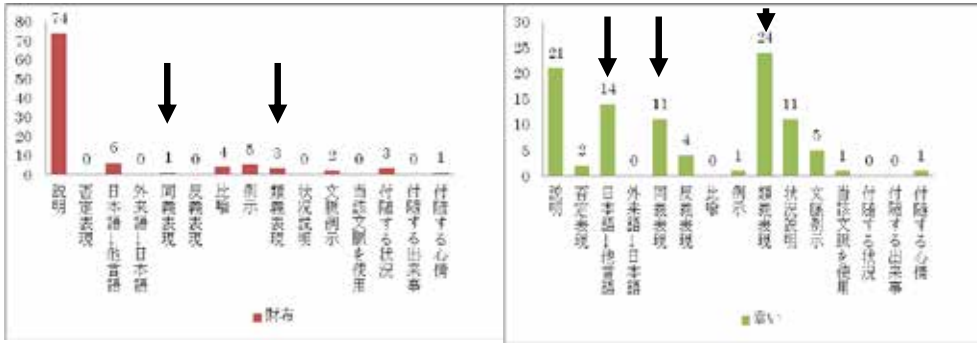


図4 分析結果「財布」

図5 分析結果「幸い」

言い換えの例を見ると、「財布」は同義表現や類義表現がほとんど見られず、「お金を入れるもの」「お金を守るものです」「お金が入っているかばんのことで」などと説明の方法が用いられ、より複雑な形式で言い換えられている。それに対し「幸い」は、「ラッキー」「よかった」などと初級語彙で言い換えられている。このことから、語彙・表現により「言い換え」方法は異なり、特に学習者にとって易しい語彙ほど言い換えるのが難しく、より複雑な形式で言い換えるのに対し、難しい語彙ほどやさしい言葉で言い換えられると言える。

5 まとめ

言い換えの方法の体系的記述を目指し、語彙分析とストラテジー分析の観点から実験調査に基づく試論を述べた。「言い換え」を原文に戻せるという基準は、「言い換え」が原文から離れた話者の積極的言語活動として、位置づけられることを初めに強調したい。また、語彙の種類、難易度により「言い換え」の方法が異なることは、外国語能力と強く関わる点で、日本語学習者用辞書記述にも有益な示唆となろう。

今後の課題としては、日本語レベルと言い換えについての検証が必要と考えている。「言い換え」とは、『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』の記述においては、補償という記述で体系化されている。

成功を確実にするために、範囲をより狭くして、能力にあわせて目標を下げることを回避方略 (Avoidance strategies) と呼んでいる。一方で、対処する方法を見つけて、より上のレベルで対処しようとすることは達成方略 (Achievement strategies) と呼ばれている。達成方略を用いると、言語使用者は自分が持っている能力を積極的に使う方略をとる。簡単な言葉を使って、大体同じことになるように言い直してみたり、過度に一般化してみたり、言い換えてみたり、言いたいことの部分部分を取り出して説明してみたり、L1 (第一言語) の表現を「外国語化する (foreignising)」ことを試みたりするのである。

(吉島・大橋訳 2004 p.67)

今回複数地域での調査を行ったことで、既習の構文の使用等、各教育機関での教材や教育内容の影響も見られたが、漢字圏と非漢字圏の異なりの追究、日本語レベルと「言い換え」方法については今後の課題としたい。

注

¹くろしお出版『テーマで学ぶ基礎日本語 NEJ : A New Approach to Elementary Japanese』

UNIT23 「Miserable Experiences (ひどい経験)」及び、くろしお出版『続・読みへの挑戦』 p.43 より一部改めて使用した。

² <http://language.tiu.ac.jp/> (2014年9月1日)

³ <http://jreadability.net/> (2014年9月1日)

⁴ 以下、調査協力者のデータは回答のままを示している。

<参考文献>

国際交流基金 (2010) 『JF 日本語教育スタンダード 2010』, 第三版, 国際交流基金.

国立国語研究所 (2002) 『「外来語」言い換え提案— 分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫 —』, 国立国語研究所.

佐藤和之 (2009) 『「やさしい日本語」の構造——社会的ニーズへの適用に向けて』, 弘前大学人文学部社会言語学研究室.

根岸雅史・村越亮治 (2011) 「文法の手続き的知識をどう測るか」 *Journal of Japanese Language and Culture* (7), pp.1-15.

野原美和子 (2000) 「学習者が自己修正時に用いるコミュニケーション・ストラテジーとは」 『岐阜大学留学生センター紀要』, 53-63, 2001-02, 岐阜大学.

吉島茂、大橋理枝編訳 (2004) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』, 朝日出版社.

Tarone, E. (1981) “Some Thoughts on the Notion of ‘Communication Strategy’.” *TESOL Quarterly*, 15, pp.285-295.